



# 義塾の学食

～いま・むかし～



1986年の日吉キャンパスにて



寄宿舍には約400㎡の大食堂が作られ、後に小食堂もできた。昭和初期には、教室や塾監局の地下にも食堂が作られ、塾監局地下の食堂では医学部食養研究所が調理した食事が10銭の廉価で供され、塾生の人気を呼んだという。その後、三田はもとより、他のキャンパスでも学食は時代に合わせて進化してきた。

義塾の学食の歴史は古く、慶應義塾と命名される前の後期鉄砲洲時代（1863～68年）に食堂があったことが、当時の塾生の回想から分かる。1871年の三田移転を機に制定された『慶應義塾社中之約束』中の「食堂の規則」には食事時間やマナーが記されていて、いち早く椅子に座る欧米風のスタイルが取り入れられていた。1900年に建設された大

## 義塾の学食 — その始まり

学生生活のなかで学食は欠かせない。卒業後も、授業や課外活動とともに学食も思い出の一角を担うに違いない。カレーやラーメンの味を懐かしむだけでなく、学食のテーブルでクラス仲間やサークルメンバーと語らったシーンも、かけがえのない義塾の思い出となる。今回は、義塾の学食の始まりや、現在の各キャンパスの学食事情を紹介する。



山食 60周年記念の会での塚田幸さん

### 山食

1961年には西校舎建設のために現北館

に建てられている。その後、山食は1949年に建てられた学生ホール内に移転した。さらに山食と言われ始めたと言っている。その後、山食は1949年に建てられた学生ホール内に移転した。さらに山食と言われ始めたと言っている。その後、山食は1949年に建てられた学生ホール内に移転した。さらに山食と言われ始めたと言っている。

戦後の三田キャンパスの学食を語るには、やはり「山食」から始めるべきだろう。初代経営者の塚田馨<sup>かほろ</sup>氏は1934年より義塾の学食に勤務し、1941年に消費組合（生協の前身）から三田の食堂の経営を引き継いだ。空襲で焼失した食堂をいち早くバラックで再建したのも塚田氏である。「山食」の名前の由来は、三田山上の食堂だからという説があるが、塚田夫人で2代目社長でもあり、「山食のおばちゃん」と慕われた塚田幸<sup>ゆき</sup>さんは、バラック時代の食堂は風が吹くと揺れるため塾生が「まるで山の食堂じゃないか」と言っ



学生ホール落成式(1949年)

1962年にオープンしたその学食は、従来の学食が一般業者または生協との委託契約で運営されていたのとは異なり、塾生への福利厚生の一

付近に移り、1991年に現在の西校舎中階へと移転した。1997年には塾員多数が集まり、93歳の幸さんを迎えて60周年記念の会も行われた。三田キャンパス内で移転を繰り返した山食には、その時期それぞれの塾員の思い出があるだろう。場所は移れども、

ご存じ「山食のカレー」の味は今も昔も変わらない。

西校舎中階の山食から階段を下ると、「生協食堂」がある。ここにはかつて義塾直営の学食があった。西校舎竣工後、



生協食堂



環として、仕入れ、加工、販売など食堂業務全般を、義塾が責任をもって運用・管理するという画期的な試みだった。しかし、諸般の事情により1991年で営業を終了し、その後に慶應生協三田食堂となった。現在は、豊富なメニューとリーズナブルな価格で、三田キャンパスのメイン学食として親しまれている。

る。壁には、1949年の学生ホール落成時に山食の壁面に描かれた猪熊弦一郎の壁画「デモクラシー」が移設されている。上部が山型なのは、学生ホールの壁面の形の名残である。現在南校舎4階にある「ザ・カフェテリア」は、当初は北館にあった。1994年の北館完成とともにオープンし、南校舎建て替えに伴う事務室などの移転で2008年に一旦閉店し、2011年に新築なった南校舎で復活した。2005（08年には、南館1階に「Planet Cafe」という喫茶コーナーがあった。ピザラを経営している会社による出店だったが、ピザではなくホットドッグやサンドイッチなどの軽食を提供していた。



## 日吉キャンパス

## 赤屋根食堂から食堂棟へ

1934年4月、日吉キャンパスが開校した。まだ日吉村といわれていた地域に、予科新入生約1000名が入学したのだから、昼食の場所に困ったことは容易に想像できる。そんななか同年11月に、現在の高等学校のグラウンド付近に、義塾の消費組合経営による待望の大食堂がオープンした。ちなみに消費組合は、1903年、三田の寄宿舎内でのパンの販売をきっかけに発足している（当時の理財科教師ヴィ



赤屋根食堂

ッカー스가、講義の中で西洋の消費組合の話をしたことに影響を受けての結成だったとも言われている。寄宿舎有志が株主となった株式会社として終戦直後まで活動して、現在の生協に引き継がれた。この食堂はコテージ風の木造2階建てで、塾生から「赤屋根食堂」の愛称で親しまれていた。戦後、日吉キャンパスが米軍に接収されていた1946年3月に建物は消失したが、返還後、高等学校の食堂として再

建された。1956年に営業を終了し、1973年頃には建物も取り壊された。返還に伴い、新たに田沼文蔵氏が大学と高等学校に食堂を開いた。後に田沼氏は塾生から社名を公募し、1954年に「グリーンハウス」と命名した。名称が採用された塾生には食券1年分が贈られたという。なお、義塾の学食を機に設立された同社はいまも日吉で数店舗を展開している。

野球部員に愛されたのが飯田信治氏経営の「梅寿司」である。かつて梅寿司は大田区の武蔵新田にあり、同地の新田運動場で練習を行い合宿所もあった野球部関係者から親しまれていた。しかし、日吉開校に伴い、運動場は閉鎖され、野球部も日吉に移ることになった。慶應ファンの飯田氏も店ごと日吉に引っ越し、キャンパス内に新「梅寿司」を開いたのである。そのほか日吉には「二幸食堂」もあった。

そして1974年、現在の位置に食堂棟が建設された。当時は1階には約800名収容の二幸食堂が、2階には150名収容の梅寿司と230名収容の日吉初の生協食堂が入り、塾生の胃袋を満たしていた。



食堂棟



二幸食堂食券機



梅寿司



グリーンズテラス

しかし約30年を経て食堂棟の老朽化が目立ってきたため、塾生と教職員がともに食堂運営について意見を交わし、食堂棟は2005年に全面リニューアルオープンした。

現在の食堂棟は1階に「遊遊キッチン」「麺's遊遊」、2階に「グリーンズマルシェ」「G's Cafe」「SABOTEN Express」があり、いつも塾生でにぎわっている。

キャンパス内で穴場の存在なのが、北端の第6校舎の「グリーンズテラス」である。一部でリコシヨク（理工食）とささやかれるほど理工学部生の利用が多いが、他学部の塾生も一度は行ってみたいだろう。鉄板焼きとどんぶり物が充実している。

## 過去と現在のメニュー価格を比べてみました！

食堂	メニュー	1978年	現在(税込)
山食	ビーフシチューライス	¥400	¥510
	スブタライス	¥300	¥460
	カツ丼	¥350	¥500
三田・生協食堂 (1978年当時は学生食堂)	カレー	¥150	¥259(中サイズ)
	カツカレー	¥320	¥410(中サイズ)
日吉・生協食堂	カツ丼	¥300	¥432(中サイズ)
	サバ塩焼き	¥60	¥194

『塾』のカットも担当しているヒサクニヒコさんが『医学部六十周年記念誌』（1983年刊行）に掲載した三田・日吉キャンパスのイラストマップに、1978年当時の食堂メニュー価格が書かれていました。現在の価格と比較してみましょう。

## 信濃町キャンパス

信濃町に医学部が開設され、大学病院が開業した1920年には、すでに業者による食堂があった。1920年代後半になると、

現在の東門あたりに三四会館（後の学生ホール）が建てられ、塾生向けの食堂が入っていた。三四会は、現在では医学部の同窓会組織だが、当初は医学部生による団体で、その三四会館の1階には売店とともに桑野伊之助氏の経営する食堂があった。塾員の回想によると「食堂も極めておおらかで、飯と沢庵は食い放題。安い惣菜を買えば満腹になる」ということで、しかも午食のみで、これでは全く採算がとれず、桑野氏は途中で止めてしまった」とある。

そして戦後、6号棟地下で「レストランえん」が、新棟11階では「オアシス」が営業していた。現在は和食の「百花百兆」がある正面玄関脇にはかつて「慶應四谷食堂」があった。その後、レストラン・



医学部三四会館食堂

喫茶「ブランシェ」となり、当時としてはしゃれた店だったが、新病棟の着工で取り壊された。また、「オアシス」のあった場所では現在「ザ・パーク」が営業しており、見晴らしの良い店内には一般客の姿も多く見られる。しかし、多忙な学生や病院関係者たちは塾生・教職員専用の「グリーンズカフェ」を利用したり、売店等を買ってきたものを敷地内で食べたりすることが多いようだ。



四谷食堂

矢上キャンパス

矢上キャンパスには1972年の開校時から、生協食堂があった。木造平屋建てだったが、近くに飲食店が少なくこともあり、ここが頼りだった。1989年に厚生棟として建て替えられ1・2階が食堂となり、狭さが改善された。2000年竣工の創想館1階には喫茶「ラ・ポワール」が開店し、その場で焼き上げるフランスパンやカレーパンが塾生に好評である。

さらなる食環境の向上を目指し、2012年12月には「屋台村」を誘致。ランチタイムには曜日ごとに、ドネルケバブやタコライスなどを販売するワゴン車が現れ、人気を博している。



屋台村



ラ・ポワールのパン

湘南藤沢キャンパス



学生ラウンジ

1990年のSFC開設当初から地元業者による学食があったが、撤退に伴い学内で食環境改善プロジェクトが組織

され、新業者選定にあたりアンケート調査を実施した。塾生からは「談話やサークル仲間と過ごす場」「おしゃやかな雰囲気」などの希望が、教職員からは「ビジターの接待や打ち合わせに使える場」との要望が出され、2005年に新学食が誕生した。

厚生棟地下の「SOUTH WING」と「NORTH WING」の2つの生協食堂は計650席。1階にはカフェテリア「レディバード」、教職員向けの「タブリエ」。鴨池を見渡せるラウンジには「サブウェイ」がオープンし、現在も連日にぎわっている。なお、看護医療学部校舎にも生協食堂がある。

芝共立キャンパス

義塾薬学部以前の共立薬科大学の時代、旧3号館の地階に食堂があった。その後、2002年に竣工した現1号館2階に、学食（学生ホール）がオープンした。

2008年に義塾と合併して、芝共立キャンパスとなった。それまで学食を運営していたのは、共立薬科大学と同窓会が共同出資して1998年に設立した「株式会社共葉なごみ」だった。合併後、「株式会社慶應薬学事業会」へと移行し、学食の運営も同社が行っていた。その後、薬学事業会の解散に伴い、2013年から慶應生協の運営となり、リニューアルした生協食堂が



芝共立生協食堂

スタートしている。日吉などの生協食堂で人気の「慶應パワー丼」も、不定期だが提供されている。